

小宮豊隆

漱石先生

漱
石
先
生

今日は漱石先生の祥月命日であります。ぜひ私に先生の話をしろというので、出てまいりましたが、題は「漱石先生の思い出」となっている。しかし実は私はここで、よく思い出話につきものになっている、先生の逸話のよくなものを、思い出し思い出しお話ししようとは思っていないのです。それにはまた別に、しかるべき人もいるはずです。私は、先生の人となりの内で、先生の著しい特徴のようなものを、一つ取り出してきて、それについて

てお話ししようと思うのであります。先生の先生らしいところを委曲を悉つくして述べるといいのであります。十分ぐらいの余裕では、そんないろんなことを、委曲を悉してなぞ、とうてい述べてはられないのです。

先生は、生一本の、雑ましり気のない、純粹な、美しい魂を持つていた人でありました。それだけに先生は、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しいものを愛し、反対に、お世辞をつかったり、体裁をつくろったり、ごまかしたり、嘘をついたり——あらゆる意味で、純粹でないもの、喰わせもの、まやかしたもの、贗ものを憎んでいま

した。よく先生は、あの男と向き合って坐っていると、あの男の腹の中が透いて見える——透明な感じがして好い心持だとか、あの男と向き合って坐っていても、あの男の腹の中が透いて見えない——透明な感じがしないから厭だとか言っていました。先生には、行住座臥、この生一本の、雑り気のない、純粹な、美しいものが、問題になっていたのです。先生は、一口にいうと、この生一本の、雑り気のない、純粹な、美しいもののために、その反対の、純粹でないもの、喰わせもの、まやかしもの、贗ものなどを相手に、一生の間、戦い通した人であ

ったと言っているのではありません。

そのことをお話しするのに、先生の子供の時分のこと
で、たいへん都合の好い例がある。まずそれを二つばか
りお話しして、それから先へ進むことにしたいと思いま
す。

先生は、東京の牛込で生れ、生れ落ちるとすぐ里子に
出され、まもなくそこから取り戻されたが、しかし三つ
の年にはまた、よそへ養子にやられました。ところがそ
の養家先で、養父と養母との間に、妙なごたごたが持ち
上がったたりしたために、先生はまた実家へとりもどされ

た。これは先生の九つの年のことでもあります。この話は、先生がまだ養家先にいるうちのことです。たぶん、先生の六つか七つかくらいのことではないかと思えます。

先生の養母が、ある日客と話をしているうちに、あるよその女の人の噂が出たのだそうです。その時養母は、傍でとても聞いていられないような言い方で、その人の悪口を言ったと言います。ところが偶然にも、客の帰ったあとで、その噂をされた本人が、養母をたずねてきたのだそうです。すると養母は、つい今し方とは打って変

って、その人に、実にそらぞらしいお世辞をつかうのみならず、しまいには、たった今誰さんとあなたのことをたいへん褒めていたところだったなどと、余計な嘘までつきはじめたのだそうです。そばに坐っていて、前から話を知っていた先生は、それをきくやいなや、不愉快で不愉快でたまらなくなつて、とうとうその客の前で、養母に向つて、あんな嘘をついてらあと、養母の面皮を剥ぐようなことを、言ったのだそうです。先生はあとで養母からたいへんに叱られ、お前みたいな子といつしよにいと、顔から火の出るような思いをしなくつ

ちやならない、と言われたといいますが、その時先生は、養母の顔から早く火が出りやいいくらいに思ったということが、先生の「道草」の中に書かれています。

もう一つの話は、先生が牛込の実家に帰ってきてから後の話ですから、少くとも先生の九つくらいの時の話であるはずで、当時先生は、実家のお父さんお母さんのことを、おじいさん・おばあさんと呼んでおり、事実また先生は、当時、それが自分の、ほんとおじいさん・おばあさんだとばかり、思い込んでいたのだそうであり、これはおそらく養家先の父母になじませるために、

そうしたものに違いないのでありますが、しかし先生の
お母さんは、先生の生れる時に、こんな年になって子供
を生むのは恥かしいと言われたと言いますから、たとい
先生を養子に出さなかつたとしても、実家のお父さんや
お母さんは、そうした名前で、先生に、自分たちを呼ば
せたかつたのではないかと、想像されます。それはと
もかく先生は、実家に帰ってきながら、それを実家とも
知らず、自分の生みの親のそばに来ていながら、それを
自分の生みの親とも知らず、おじいさん・おばあさんで
その日その日を暮らしていたのであります。

しかし当時の先生は、浅草から牛込へ移ってきて、なぜか非常に嬉しかったそうです。そうしてその嬉しさが、誰の目にも著くくらい、著しく外へ現われたのだそうです。たぶんそれがいじらしかったためだろうと思います。ある晩先生がひとりで座敷に寝ていると、女中が枕元へそつとやって来て、先生をよび起し、あなたがおじいさん・おばあさんと思っていらっしゃるかたは、ほんとはあなたのお父さんとお母さんだ、さつき、おおかたそのせいであんなにこっちのうちが好きなんだろう、妙なものだなど、二人で話していらっしゃるところを聞い

たから、教えてあげます、誰にも言っちゃいけませんよと、ちよつとその「ほんとのこと」を教えてくれたと言います。先生にはこれが、たいへんに嬉しかったのだそうです。しかしそれは、事実を教えてもらったから嬉しかったというのではなく、その下女が単に自分に親切だったのが嬉しかったのだと、先生は「硝子戸の中」に書いています。

生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂を持っていた先生は、お世辞をつかったり、体裁をつくろったり、ごまかしたり、嘘をついたりすることを憎んで、四十年

もそのうえも昔の経験でも、こういうふうには、手にとる
ようにあざやかに覚えているとともに、また、生一本な、
雑り気のない、純粹な、美しい、他の親切ひとに対する感激
をも、それが四十年もそのうえもの昔のできごとであつ
ても、こういうふうには手にとるようにはあざやかに覚えて
いたのであります。

嘘も方便だという諺みたいなものもできあがっている
ほど、多くの人は、この世の中に生きてゆくうえに、嘘
もまた必要であると、考えているのであります。したが
って多くの人は、自分も嘘をつくものであるし、人も嘘

をつくものであると、思っている。人を見たら泥棒と思えなどと、多くの人は、むやみに人を信用すると、とんだ目に遭う、人は疑ってかかるべきものだど、教えこまれて育ってきた、また教えこんで育ててゆこうとする傾向を持っているのであります。そういう世の中に住んでいて、先生のように、純粹なものを愛し、純粹でないものを憎む点で、少しも妥協しようとしめない人間は、多くの場合、世の中が厭になり、人間が厭になり、——一口に言えば、厭世的にならざるを得ない。ことに先生は、田舎者からは、活き馬の目を抜くとさえ信じられていた江

戸に生れて、いろんな点で腐敗し、墮落しきった、御一新前後の江戸の家庭の空気の中に育ったのです。先生が、それに対抗して、その魂を護りおおせることは、生やさしい仕事ではなかったに違いない。先生は、早くも物心のつく二十二三の、高等学校時代から、かなり厭世的な人生観を持つようになっていました。これはちようどその時分に、正岡子規に宛てた先生の手紙をお読みになると、かなりな程度まで、具体的に窺い知ることのできるはずのことです。

しかし先生は、そういうふうには、だんだん厭世的にな

ってゆかざるを得なかったとは言っても、根本において、人間を愛し、人間を信じる心持は、決して失うことがなかったのであります。これは先生が厭世の極、自殺しなかつたのでわかると、いうこともできるかもしれな
し、また少しも皮肉な冷酷な世の中の見方をしなかつた
のでもわかると、いうこともできそうですが、し
かし、それよりもなによりも、先生が、どういう場合に
も、自分の生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂
を、傷つけることなしに、護り通すことができたという
こと、並びに先生の人生において、たといたまではあつ

ても、先生の魂の上に、同じように、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂が、影を落して、先生の息苦しい世界に、歓びと寛ろぎと慰めとを与えて、先生の、先生自身の魂を護り通す仕事の険しさを、柔らげたためであると思われる。それはたとえば、西洋の文芸などを読んで、その中に自分の魂が求めているものを発見し、それに共鳴して歓び楽しむというのでもいいのではありませんが、そうでなくても、たとえば先生にほんのお父さんお母さんを教えてくれた女中のような、現実の事実の一つでも、先生の目の前に、かなり広い、人間を愛

し人間を信じることの可能性の展望を、広げて見せることができたのであります。もちろんそういうことは、沙漠の中のオアシスかなぞのように、きわめてポツリポツリとしか、先生の人生の行手に、横わっていないなかったのかもかもしれません。しかしそれだけでも先生はなおそれによつて、寒々とした自分の生活を暖め、元気を回復し、さらに自分の旅程を続けることができていたのであります。

しかし、一方から言うと、自分の中に美しいものが充ち充ちており、それに外から響を合せるものがたまにしかなく、しかも自分の周囲は、自分の中の美しいものの

ために、いつそう荒涼たる沙漠にしか見えなかつたとすれば、人は、少しでもこの荒涼たる沙漠を住み心地のいいものにするために、それに鋤を入れ、草木を植え、できるだけ多くのオアシスを、自分の手で創造したくなるはずではないかと思われます。そうでもしなければ、自分はその荒涼のために、息の根もとめられそうな感じを受けるに違いないからであります。そのうえ、人が、根本の意味で人間を愛し、人間を信じているとすれば、そういう人間に働らきかけ、そういう人間をして、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂を尊敬させ、尊敬

することによって所有させ、かくしてそういう人間を高みに引き上げようと努力することは、たといその実現の日は遠かったとしても、すでにそのことの可能性が信じられるかぎり、その人にとって、それが自分の天職でもあるかのような、必然として感じられてくるはずでもありません。

先生は西洋から帰ってきて、自分の中に鬱屈したものを、「猫」によつて吐き出してしまふことができた時、先生は、何か非常に明るい、初めて生き甲斐があるような心持になりました。そうしてその後、やつぎばやに、

自分の頭の中の世界に表現を与えつつ、とうとう教師としての自分のそれまでの生活を棄てて、作家としての道を踏み出しました。先生は、荒涼たる沙漠の中に、みずから鍬を打ち込んで、オアシスを創造しなければいられなかったのであります。そうしてこのオアシスの創造は、第一には、自分自身のためでありました。そうして第二には、他人のためでありました。先生は、自分の中の、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂を護りつつ、かねてこの点において、他人に活はたらきかけ、他人を反省せしめて、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂

の世界に、引き入れようとするのであります。

これは先生の最後の大作「明暗」について考えてみても、明白であります。

「明暗」には、あらゆる人間の弱点が書かれています。あすこに出てくる人間は、すべて私だらけの人間である。たとい奥底の方には、良いものを持っているものでも、一方で持って生れた私のために、その良いものを出しきれないで、不純な、ごまかしの、不親切な人間としてしか動いていない。ことにあの中で主人公の役目を勤めている津田という男などは、自分の妹から「御自分達のこ

とより外になにも考えていらつしやらないかた」だとか、
「自分達さえ可ければ、いくら他が困ろうが迷惑しようひと
が、まるでよそを向いて取り合わずにいられるかた」だ
とか、「あなたがたは決して他の親切を受けることので
きない人だという意味に、たぶん御自分じゃ気が付いて
いらつしやらないでしょう」とか言われているだけあつ
て、相手の短所ばかりを見て、それで自分のほうがえら
い気になっている、したがって自分の短所には決して気
がつかないで、独りで思い上がっている人間として、し
かも自分で平気で嘘をつき、他も必ず嘘をつくものと思

い込んでいて、それで少しも厭世的になることのない、——生一本の、雑り気のない、純粹の、美しい魂とはおよそ反対の、打算に明るい、いつでも利害を忘れることのない、よごれた、不信な、愛のない、人間として描き出されているのであります。津田には、至情の動くところ、己を空しゆうして、対象の中に跳り込むという、美しいものの閃めきがない。それだけに津田には、捨て身なところが無い。いつでも身をかわしかわしして、何か大事なものを避けてばかりいる。したがって津田は、一時、目前のことはごまかして通ることはできても、最後

のどたん場へ行つて、どうにも身のかわしよすがなくなつた時には、牛の角のようなもので、ずぶりと横腹を突きさされるにきまつている。しかも津田には、そのずぶりと横腹を突きさされる時の、漠然たる不安に襲われて、絶えず何かを恐れ、絶えず何かを追っかけられるような日が、一日一日と濃厚になってくるのであります。

もちろん「明暗」は、中途半端で切れているものであります。したがって「明暗」がこの先きどうなるかは、我々の想像を絶したことででもありますし、またそんなことを想像してみるのは、余計なことだと言えそうので

もありますが、しかし「明暗」の今まで書かれている部分だけから考えてみても、津田が、これまでの自分の欠点なり自分の弱点なりを、真面目に反省し、なんらかの方法でそれらのものを乗り切る覚悟を立てるのでなければ、決して真人間にはなれない、真人間になれなければ、津田はいよいよ軽蔑すべき人間である、——その津田の、人間としての、生きるか死ぬかの、際どい境目を書こうとしたものが、「明暗」であるということだけは、疑えないのであります。

私はこれまでたびたび真面目な「明暗」の読者から、

「明暗」は読んで、ずいぶん不愉快な作品である、あれはどうも苦しくて、とうてい長く読んでいるに堪えないものである、という批評を聞かされました。これは私といえども同感であります。私のみではない、先生自身もまた同様であったと見えて、「明暗」を書いている間、先生は、朝の内を「明暗」の執筆にあて、午後から夜へかけては、不愉快な心持を一掃するため、書をかいたり、詩を作ったりしていると、言っていたられました。しかし先生が、それほどの不愉快を忍んでもなお、「明暗」を書かずにはいられなかったゆえんのものを考えてみれ

ば、先生の意志は明白であると言っているいいのであります。先生はこうして、ちよつと見たところではたいそう体裁のいい人間の、奥深いところに喰い込んでいて、その人間を動かしている不純なもの、ごまかすもの、嘘をつくもの、利害を打算するもの、我儘かってに振舞うもの——虚偽だの虚栄だの私だのを、丹念に掘り出して、人の前に曝しものにするのが、人々にとって必要なことであると、信じたのであります。人々はそれによって、今までまるで気がつかずにいた、自分の腹の底に喰い込んでいるそういう穢ないものを、はつきり反省するに違

いない。元来穢ないものを、穢ないものとして、はつきり名ざすということは、人々にその穢なさを穢なさとして、認識させることであります。しかも人々は、穢ないものを穢ないものとして認識することによって、その穢なさを反省する。反省は超越への促がしである。こうして先生は、人々を、信と愛と誠とが支配する、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい世界の中へ、連れて行くこととするのであります。穢ないものを穢ないものとして書いて、それが誰にも反対することのできない確実さと鋭敏さと精到さと深刻さとを持ち得るためには、もちろん

んその穢ないものを攫^{つか}み出す頭を必要とするのではあります。しかしそれとともに、いかなる微細なよごれでも、それをはつきりよごれとして取り上げることのできる、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂を必要とすることは、言うまでもないことだと思います。

先生は、生前よく、気むずかしやだの、変人だの、ある時は、気違いとさえも言われました。しかしこういう魂を持ち、こういう道があるいてきた人間が、はたして気むずかしやであるか、変人であるか、ないしは気違いであるかは、問わずして明らかかなのではないかと思いま

す。もちろん先生は、たびたび繰り返してきたように、生一本の、雑り気のない、純粹な、美しい魂の所有者でありました。同時に先生は、それを護り通すことに、火のような情熱を持っていた人でありました。したがって、その純粹を傷つけ、その美しさを害うようなものに出会って、先生が猛然としてそれに対抗するのは、当然のことでありました。その場合の先生は、むろん相手から見れば、気むずかしやでも、変人でも、気違いでも、ないしは悪魔でもあり得たに違いないのであります。しかしこっちが生一本の、雑り気のない、純粹の、美し

い魂を持って先生に対する限り、先生は、気むずかしやでも、変人でも、いわんや気違いでもないのみならず、先生はそれを尊重し、愛撫し、そのためにあらゆる親切を尽そうとする、実に暖かな、思いやりのある、かつ感激的な人でありました。生前、先生を愛し、純粹に先生に対する愛情のみから、先生の許に集まった弟子どもは、それぞれに、そういう経験をしみじみ重ねてきたものばかりであるはずであります。弟子どもはみんな、先生を気むずかしやだの、もちろん気違いなどは、少しも思っていない。あんな暖かな、あんな親切な、またあんな他ひと

の長所ばかりを見てくれて、他の^{ひと}短所を取り扱うに思い遣りのある、そのくせ自分の愛や親切や意見を、他に^{ひと}決して押しつけようとしない、良い先生はないと思っ
ているのであります。

（昭和九年十二月九日、仙台中央放送局）

日本文学電子図書館

漱石先生

著 者 小宮豊隆

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店

昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館